豊岡市教育研修センターだより

豊岡市教育委員会　R５（２０２３）.8.28　　No.7
豊岡市 HP→左中段「くらし・行政」→右下「教育・学校」→「教育研修センター」へ
豊岡市のホームページにもアップしています

豊岡市教育フォーラムより

嶋教育長挨拶より

教育フォーラムの意義について

東井義雄先生の不易の教育観に学びを得る。
① 「子どもに寄り添う」…子どもの思い方、感じ方、考え方等を見取り、なぜそのように感じたり、考えたりするかを考え、教育実践につなげる。
② 先生たちの実践を大切にし、決して派手な取組でなくても値打ちある実践、子どもの命にかかわる実践といった尊い実践をみんなで大切にし、みんなで学ぶ。

実践発表より

両先生とも、「先輩、同僚に相談、頼る。」「子どもに学ぶ」ことを大切にされていました。

子どもの事実に学び　子どもに寄り添う教育（冨山　周作　先生）

・実践からの学び…「寄り添う」とは、想いをよく聴き、よく知り、その子にとって正しい方向へ導くこと。
・大切にしていること…居場所を作ること、納得して活動すること、つぶやきを聴くこと、間違いを宝にすること。（協働性、自制心、やり抜く力、他者理解）

生徒とつながるとは（福冨　光　先生）

・実践からの学び…誰のために行動していたのか、理想を突き付けていた。つながるとは、生徒にとって信頼できる人になること。
・大切にしていること…お互い、頑張りを認める、それぞれの状況を支え合う、集団として高め合う、自分で課題や目標を見つけられるように。（自制心、やり抜く力、他者理解）

参加者の声

○今回も新鮮さを感じる実践発表でした。根底に流れている不易の教育、流行の教育、その実践の良さを裏付ける講演がセットになったフォーラムであったと感じています。お二人の先生の実践に基づいた発表をお聞きし、「子どもに寄り添う」という意味を考える機会をいただきました。すべての児童に対し、同じ対応でよいわけではなく、状況や背景を考慮し、最も効果的なかかわりを持つ必要があると感じました。
○今年度も２名の素晴らしい先生方の発表には、わが心を奮い立たせていただきました。両名に感謝します。二人とも「寄り添う」という言葉を、自分の体験を通して、自分なりの言葉で自らの心中に落とし込み、実践していこうとされている姿勢がありありと伺え、拝聴している私たちも、今一度「子どもに寄り添う」ということについて自らの言葉で自信を持って語れるように、日々の実践を充実させていかねばならないと、気持ちを引き締めることができました
○常に子どもの事実に学び、子どもに寄り添いその成長を喜びとしている先生方の力強い実践を聴くことができ、とてもすがすがしい気持ちになり、良い時間でした。と同時に、「日々どれくらい子どもと向き合えているのだろうか。」と自分自身見つめ直す良い機会となりました。

総括助言、講話実践　田野　邦彦　先生より

・非認知能力が注目される背景…社会が必要とする人材の要素、柔軟な力、社会的成功に影響
・非認知能力を伸ばすコツ…「自分を高める力」、「自分と向き合う力」、「他者とつながる力」の枠組みで整理。
〇自己決定…「内発的動機付けの重要性」＝内的な楽しみや意義を動機づけとして、人は決断を下す。
〇主体的・対話的で深い学びの考え方…「ちゃんと受け止めて、的確に評価してくれる条件の下では、やったこともないチャレンジができる」、「発表の成功には、良い観客が必要」。
〇コミュニケーション授業で大切にしていること＝「他者性」。非日常の状況で困難な状況を一人の力でなく、グループでどう主体的・協働的にクリアしていけるかが大切。思考の促進のために、あえて驚きを設定したり、困難な岐路に立たされる場面の設定したりする。
〇ワークショップの進行に必要な２つの観点＝「プログラム（デザイン）」と「ファシリテーション（気づきや学びを引き出すこと）」、この２つは完全に切り離して考える。
授業において、綿密に計画しても、不確定要素が入ってくる。臨機応変に気配を感じて微調整する。要するにいい塩梅を感じることを大切にしている。
〇フレキシビリティ（柔軟性）…一つの考え方に捉われるのではなくいろいろな条件を勘案しながら最良の判断を下す力が大切。様々な言動に対して的確な評価をして非認知能力に位置付けることが重要。
・まとめとして、ファシリテーターとしての指導者の役割は以下の３つ。
① 同じ目線で合意形成のきっかけ、刺激を与える。
② プロセスをよく観察して、子どもたちをしっかり見守る。
③ 的確なタイミングで、言語化し、意識化していく。

参加者の声

〇田野先生のご講演は、私自身、豊岡市の取組が整理され、大変分かりやすく聴かせていただくことができました。特に合意形成でのチーム（組織するメンバー）の役割について、さらに詳しく教えていただきたいと思いました。創造力、連想する力、まとめる力、クリティカルシンキング、判断力…ほかにも楽観性、共感性、ポジティブ、集中を促す言葉や態度…一つのものを作り上げるときに、（子どもたち）一人一人が持ち合わせる力や役割について、その場にいる指導者が、どれだけ広い視野と豊かな体験でそれらを認められるか（価値付けられるか）が学級づくり授業づくりにも大きく影響する。まずは、ファシリテーターとしての役割も含め、われわれ（指導者）がフレキシビリティーを意識し、自身に根付かせることを心掛けたいと思います。
〇とても印象的だったのは、「関係性は信頼関係」、「プログラムとファシリテーションは分けて考える」ということです。関係性は授業を支える重要な要素です。受け入れてくれる仲間、聴き合える学級を目指し、日々の授業を通して関係性を深めていくことは、非認知能力を向上させ、子どもの自立に大きく寄与するのだと考えます。また、ファシリテーションには常に不確定要素が入り込んでくるということは大変納得しました。そんな時、授業では強引に、教師が押し切ったり、教師が望む方に導く子どもをメインに進めたりしがちです。「いい塩梅」「いい加減」に対応しつつ、ゴールまで向かえるよう、教師はもっと子どもを見取り、変わらなければならないと感じました。授業の中で非認知能力は見えにくいですが、ねらいを達成する中で見え隠れする子どもたちの光る様子を我々教師はもっと敏感に観察し、意味づける授業づくりが大切だと感じました。